

メーソンと京都旅行

——音楽教育史研究ノート(3)——

生地加代

(武庫川女子大学教育学科)

Luther Whiting Mason and His Trip to kyoto

——History of Music Education Report (3)——

Kayo Ikuchi

Department of Education, School of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan

Abstract

It is well known that Luther whiting Mason had a great contribution to music education in Japan. During his stay in Japan, Mason took a trip to Kyoto to visit Kyoto Prefectural School for the Visually Impaired and the Speech-impaired, which Tashiro Furukawa had founded. The school was highly estimated as the first school for physically challenged people in Japan in the modern era. Mason also highly praised Furukawa and his educational principles. Furukawa's school should be evaluated from the point of view on the education of physically challenged people of those days in the world.

キーワード

Luther Whiting Mason, 音楽取調掛, 古川氏, 京都府立盲啞院

緒言

日本の音楽教育は「学制」(1872年 明治5年7月)に基づく科目に「唱歌」(小学校), 「奏楽」(中学校)を置いたことに起源するが, 実際は文部省音楽取調掛(The Japan Music Academy at the Ministry of Education)の設立(1879, 明治12)とメーソン(Luther Whiting Mason, 1818~1896, アメリカ人)を音楽取調掛の外国人教師として招いたことによって開始される。

メーソンは, ボストン市の初等学校音楽監督から, 1880年(明治13)音楽取調掛に外国人教師として着任し, 音楽教師を育成し, 『小学唱歌集』の編纂を行い, 2年間という短い在日期間ではあったが, 日本の西洋音楽と音楽教育の普及に大いなる貢献をした。

メーソンは日本の伝統音楽にも関心があった。このことが, メーソンをして明治初期の京都と関係させることになる。このことは従来の研究では言及されておらず, 周知の事実とはなっていないようである。本稿では, メーソンと京都と関係を明らかにし, メーソンの日本における活動の一端を紹介する。

1 メーソンの京都旅行

メーソンは在任中の夏期休暇(7月11日~9月10日)と冬期休暇(12月25日~1月7日)に北海道・日光・京都に教育視察を兼ねた旅行をしている。1881年(明治14)の夏は日光旅行を行い, 1882年の夏は帰国の途に就いている。冬の北海道旅行は季節的に考えて無理であるから, 1880年の着任した夏に北海道旅行

が挙行されたと考えられる。

京都旅行は1880年か1881年の冬であろうと推定される。冬期休暇は2週間であるから、陸路によって東海道を下向していたのでは往復するだけでも30日も要するから、横浜から神戸・大阪への海路を利用したものであろう。

メーソンの旅行に関する詳細は東京芸術大学が所蔵する音楽取調掛の「文書綴」にあるという^{注1}。「文書綴」を見ていないので、京都旅行の詳細は不明であるが、帰国後の1885年に音楽取調掛長の伊沢修二に宛てたメーソンの書簡には、次のような1節がある。

I am especially pleased with the success of Mr. A. Furukawa, Director of the Asylum for the Mute and Blind in Kyoto.

I visited this Institution while in your country, and was exceedingly interested in his work. I think he is one of the most remarkable and ingenious men as a Special Educator, that I have ever met with.

特に感激したのは京都の聾啞者・視力障害者のための施設長・Mr. A. Furukawa に対してです。

私は日本にいた時、この施設を訪問したのですが、彼の業績に非常に心を打たれました。彼は私が今までに会った中で最も際だった才能のあるすばらしい教育者の一人だと思います。

上掲の書簡によって、メーソンの京都旅行は単なる物見遊山ではないことがわかる。メーソンは京都を訪問し、Furukawa という人物と面会している。明治14年ごろの身体障害者教育に従事する京都の Mr. A. Furukawa は誰かということになる。

2 古川太四郎のこと

明治初期の身体障害者教育に関係する、京都の古川氏とは古川太四郎(ふるかわ たしろう, T. Furukawa)を置いて他にはない。メーソンの書簡には Mr. A. Furukawa とあり、T. Furukawa とは合致しない。メーソンの書簡は『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編』第1巻所載の活字化された書簡を見たものであり、活字化の際の誤りか、メーソンの思い違いによるものであろう^{注2}。京都旅行においてメーソンは古川太四郎に会い、かつ古川の教育事業に感動したのである。

古川太四郎(1845～1907)は日本の近代盲聾教育の創始者である^{注3}。白景堂(上京区智恵光院上長者町)という寺小屋の教師の子として生れ、幕末には勤王運動に参加。維新以後は上京区猪熊通下立売南入大黒町にあった第19校(待賢小学校)の教師となる。このころ、身体障害者教育を発起し、第19校教師として、その教育を開始した。

1878年(明治11)1月、古川は京都府知事の楨村正直に障害者施設設立の認可を出願し、同年4月に許可され、上京区東洞院押小路南入舟屋町の家屋を寄付され、同年5月、ここに身体障害者の学校が開設することとなった。日本で最初の公立障害者学校の誕生である。この学校の設置は開明的知事といわれた京都府知事の楨村正直の英断と京都市民の寄付金によるところが大きい。1878年(明治11)年5月26日の「大阪日報」は「仮盲聾院開業式の模様」と題して開学式の模様を伝える。1878年(明治11)12月の在籍者数は男子38人女子18人である^{注4}。

舟屋町の校舎は仮設であったため、1879年(明治12)、上京区釜座通樺木町南入に新校舎を建設し、9月12日に移転し、京都府立盲聾院(Kyoto Prefectural School for the Visually impaired and the Speech-impaired)と改称され、古川太四郎が院長となった。これより先の7月には明治天皇の京都行幸があり、京都御所の小御所に盲聾院生徒を集めて天覧授業があり、金千円の下賜があった。これを見ても古川の教育事業が如何に異彩を放つものであるかが理解されよう。1880年(明治13)9月には、普通科目の他に音楽・紙撚細工・刺繍等の科目を兼修させ、実践的職業訓練を施し、盲聾院通則も定め、文部省から認可を受けている。

このような時期に、メーソンは京都府立盲聾院を訪問し、つぶさに授業参観したのである。訪問時期は

メーソンの冬期休暇中であるから、年末年始である。この時期は京都府立盲啞院も冬期休暇期間であるから、生徒は臨時招集されて授業が行われたものであろうか。

メーソンの京都訪問は1881年の正月であろうと推定できる。前年9月に京都府立盲啞院に音楽科が設置されたことを聞き、音楽教師であるメーソンは京都府立盲啞院に音楽教育があることに深い興味をもったと思われる。もちろん、京都府立盲啞院の音楽教育は、文部省の音楽取調掛や、メーソンの志向する西洋音楽を基礎とした音楽教育ではなく、日本の伝統音楽を音楽教育として実践したものであったが、メーソンが日本の伝統音楽に関心を持っていたこともあって、京都を訪問し、古川の音楽教育に共感し、教育全般を高く評価したのである。

3 帰国後のメーソンと古川

メーソンは1882年夏、帰国の途に就いた。これによって、文部省の音楽取調掛との関係がなくなったわけではない。1884年12月からアメリカ・ルイジアナ州のNew Orleansにおいて開催された綿業百周年博覧会に音楽取調掛は参加して、日本の音楽教育の現状を紹介した。メーソンは綿業百周年博覧会を見物し、音楽取調掛の展示に関して、音楽取調掛長・伊沢修二に書簡に所感を述べている。それが前掲した1885年の伊沢修二に宛てた書簡であり、書簡の冒頭部分には次のようにある^{注5}。尚、書簡全文は文末の※に掲載する。

I have just returned from the Worlds Exposition at New Orleans. …………… I congratulate you on the success of your Educational Exhibit at New Orleans — I think your exhibit stands among the very highest including France and United States.

私は今ちょうどNew Orleansの世界博覧会から帰ってきたところです。…………… 私はNew Orleansにおける貴国の教育展の成功を心からお祝いしたいと思います。—— 貴国の展示はフランスや合衆国と並んでかなり高度のものと思います。

これによって、メーソンと音楽取調掛とは書簡によって連絡していたことが判明する。

この書簡には古川氏のことでも登場する。それは最初に引用した書簡部分であり、前掲箇所が続いて次のような1節がある。

I understand that he has received a gold Medal for his Special suggest.

彼の特別展示はまさに金メダルに値するものでしょう。

京都府立盲啞院は、ルイジアナ州のNew Orleansの綿業百周年博覧会に展示品を出していたのである。メーソンは「特別展示はまさに金メダルに値するもの」とし、古川教育実践を高く評価している。金メダルを獲得したかどうかは明らかではないが、『京都府誌』には「18年5月米国ルイジアナ州博覧会に生徒成績品を出品し、賞状を受け」とあるから、受賞したことは確かである^{注6}。

メーソンの書簡は古川の業績を高く評価している。それは特別展示のみを見て評価しているのではない。在日中に訪問した京都府立盲啞院が高い教育内容を有する学校であることを知って評価し、綿業百周年博覧会における京都府立盲啞院の出品を見て、メーソンはそれを再確認したのである。

4 おわりに

古川太四郎の創設した京都府立盲啞院は、近代最初の公立身体障害者のための学校として有名であるが、近代最初という点にのみ価値があるのではない。その教育内容においても高水準にあったのである。メーソンにとって、京都府立盲啞院が近代最初の学校であり、近代最初の公立学校であるかどうかはまったく問題ではない。彼が評価したのは、その教育内容である。メーソンは京都旅行によって京都府立盲啞院の教育水準の高さを知ったのである。そのことは後年のメーソンの書簡によって知ることができる。

注

- (1)旅行の詳細は東京芸術大学が所蔵する「文書綴」にあるというが、未見である。（『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編』第1巻、音楽之友社 昭和62）、229P.
- (2)『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編』第1巻、242P.
- (3)古川太四郎に関しては、岡本稲丸『近代盲聾教育の成立と発展 古川太四郎の生涯から』（NHK出版 1997）が詳細である。
- (4)『京都府百年の資料』（京都府総合資料館 昭和47）324P 所載の「仮盲啞院調査表」
- (5)ここに引用するメーソンの書簡の全訳は、生地加代「音楽取調掛とメーソン」（『武庫川女子大学紀要』人文・社会科学48）にある。
- (6)『京都府誌 下』（京都府）445P.

※メーソン書簡全文

Boston, June 8, 1885

Mr. S. Isawa.

My Dear Friend,

I have just returned from the World's Exposition at New Orleans, and find your letter of the date of April 16, 1885. Also a package containing nail sticks, 3 music books and tuning fork.

I have also received the documents which I sent you and a check for \$7750/100 from your Consul in New York on account of the present your Government kindly sent to me.

I congratulate you on the success of your Educational Exhibit at New Orleans--I think your exhibit stands among the very highest including France and United States.

I am especially pleased with the success of Mr. A. Furukawa, Director of the Asylum for the Mute and Blind in Kyoto(kyoto).

I visited this Institution while in your country, and was exceedingly interested in his work. I think he is one of the most remarkable and ingenious men as a Special Educator, that I have ever met with.

I understand that he has received a gold Medal for his Special suggestion. As to the musical instruments which I propose to send to you in return for those you turn over to me for the Great New England Conservatory of Music under the Direction of Dr. E. Tourjee: I would take the Liberty to suggest

1. That you consult Prof. Eckert as to what he will most need.
2. I should think you would need two valve French Horns and one or two oboes. It is not common to have oboes in a Small Orchestra, but as your Court Musicians would manage those instruments so well, being accustomed to one of their own which is much more difficult to play, and as I understand, that is a favourite instrument with Mr. Eckert, though I would suggest them.

The wind instruments for orchestra must be first class and all of the same system as to pitch. Mr. Eckert will know all about that. I believe you have the best material as to men in the Court Musicians for a good European Orchestra in the world. You need a good teacher of stringed instruments like the Violin, Viola, Violoncello and Double Bass. Please write me and I will attend to your business with pleasure.

Yours truly,

L.W.Mason